

## レバレッジ・単利複利・コストの変化が及ぼす影響

レバレッジ・単利複利・コストの変化が及ぼす影響

### <レバレッジが及ぼす影響の確認>

#### ■レバレッジに関する説明

- ① 自己資金に対し、何倍までの資金で売買できるかを示す。
- ② ただし現金維持率(30%)分は計算上常に差し引かれている（追証対策）。
- ③ 実際の資金よりも大きなサイズで売買するので、リターンも大きくなるが DD も大きくなる。

#### ■レバレッジを下げることで、どのような変化が起こるかを確認

- ① バasket編集を開き、Basket全体のレバレッジを3倍から、2倍、1倍へと下げてバックテストを行い、結果を確認。
- ② DD が大きい戦略のみのレバレッジを下げて、Basket全体のパフォーマンスがどう変化したかを確認。
- ③ DD%と累積ネット損益、スターリングレシオはどのように変化したか？
- ④ その他のパフォーマンス指標に関しても、著しい変化があった場合はそれを示す。

### <単利・複利が及ぼす影響の確認>

#### ■単利・複利に関する説明

- ① 単利 = 常に当日の運用資産額が同じだと仮定して売買する
- ② 複利（日次） = 当日の損益を、当日開始時点の運用資産に加えて、翌日の運用資産を計算する
- ③ 複利（週次） = 週末に、その週の損益を、その週の開始時点の運用資産に加えて、翌週開始時点の運用資産を計算する
- ④ 複利（月次） = 月末に、その月の損益を、その月の開始時点の運用資産に加えて、翌月開始時点の運用資産を計算する
- ⑤ 複利（年次） = 年末に、その年の損益を、その年の開始時点の運用資産に加えて、翌年開始時点の運用資産を計算する

いずれの複利運用においても、当該計算期間内で、累積資産が期間当初資産を下回るような DD が発生した場合は、日々ベースで運用資産が減少する。

#### ■単利・複利のそれぞれの特徴

- ① 単利のメリット 1 = バックテストにおいては、ストラテジーのパフォーマンス特性を把握しやすい。
- ② 単利のデメリット 1 = 実際には破綻していても、バックテストでは売買を継続できてしまう。
- ③ 単利のデメリット 2 = 実売買で用いた場合、累積利益が増えるに従い、どんどん DD% が減っていく代わりに、なかなか資産が増えない。
- ④ 複利のメリット 1 = 資産が減ってきた際に、現実的な損益が見られる。
- ⑤ 複利のメリット 2 = 資産が増えてくると、流動性の問題が生じるが、それを事前に確認することができる（そのストラテジーの運用資産の限界が見られる）。
- ⑥ 複利のデメリット 1 = 累積利益が増大していて DD が発生すると、%では小さくても、金額ベースでは大きな額となる。
- ⑦ 複利のデメリット 2 = DD が発生すると運用資産が減るので、そこからなかなか DD を回復できない。（50%の損失と50%の利益は同じにはならない）

### <取引コストが及ぼす影響の確認>

■取引コストに関する説明：取引コストにはどのようなものがあるか？（スリッページ、手数料、金利、貸株量）

① スリッページ＝場中にトリガー+成行の注文（ストップ注文、トリガーマーケット等）を出した場合、板の流動性状況によっては、トリガー価格から大きくずれて約定することもある（最も大きなコスト）。寄付きや大引けでの売買では、バックテストでは4本音を使っているのでスリッページをつけることはしないが、流動性が低い銘柄では、見えないスリッページが発生する（自分の売買で価格を動かしてしまう）リスクは、常に考えておく必要がある。

② 手数料＝証券会社により様々（条件によってはゼロ設定もあり）

③ 金利＝信用取引で株を買うために資金を借りることで支払う金利（年利表示なので、1日あたりの金利で計算する）。貸借銘柄（信用取引ができる銘柄）であれば、日証金が定めた金利となる。一般信用の場合は、証券会社の設定条件となる。\*逆日歩

④ 貸株料＝信用取引で空売り用に株を借りることで支払う金利（年利表示なので、1日あたりの金利で計算する）。貸借銘柄であれば、日証金が定めた貸株量となる。一般信用の場合は、証券会社の設定条件となる。

■取引コストの影響をテスト：取引コストが変わると、どれくらい収益が変わるかをテストしてみる。